# 奈良女子大学大学院教育における地域連携

舘 野 和 己　　奈良女子大学文学部教授

**室長**：今日は第29回の教育研究推進室のワークショップということで，奈良女子大学文学部教授の舘野和己先生にご指導をお願いしました。奈良女子大学大学院教育における地域連携ということで，意義深いお話をお伺いできることと楽しみにしております。

では，先生のご紹介をお願いします。

**司会**：はい，それでは，今回，窓口になりました関係で，私のほうから，舘野先生の経歴と，今回お話しをお願いする趣旨説明というかたちでお話しをさせていただきたいと思います。

舘野先生はお生まれが1950年で，1974年に京都大学の文学部を卒業され，1980年に同じく京都大学大学院の文学研究科の国史学専攻日本史専門の博士後期課程を単位取得で退学されておられます。その後，1984年に奈良国立文化大研究所の文部技官として着任され，その後，奈良市の教育委員会の文化課長，また奈良国立文化財研究所（奈文研）の主任研究官，さらに平城宮跡発掘調査部の史料調査室長を経て，その間，私の上司として大変お世話になりました。その後に奈良女子大学文学部教授として，お移りになられ，そこで21世紀 COE のリーダーとして研究をまとめるというご経験もされています。京都大学から博士（文学）の学位を取られているということでございます。

趣旨の説明ですが，大学が地域のさまざまな機関と連携するということは，これまでも重要なこととして議論されてきています。特に，博物館法の施行規則の改正があり，学芸員要請課程の充実が図られるということもある中で，地域にある博物館や研究機関等々の外部組織との連携は重要なことであるということは確かであります。しかし，問題点もまた多く，ここしばらくの間，私が博物館の学芸員の方にインタビューする機会が何回かありましたが，公式には大学との連携について肯定的なことをおっしゃっていただきますが，例えばお酒が入るような非公式な場でお伺いすると，逆に否定的なことを言われることがあるということも，また確かなことであります。その辺りのお話をお伺いしたいということで，大学，研究機関双方の立場で大学院教育に携わった経験をお持ちの舘野先生に，両方の立場を踏まえてお話しいただきたいというのが，今回の趣旨です。最初にお話しいただく部分では，どちらかというと公式の話になるかと思います。後の討論では，非公式なかたちでざっくばらんに問題点等々を議論していただければと考えております。では，よろしくお願いいたします。

---

**舘野**：ご紹介いただきました舘野です。よろしくお願いします。座って話をさせていただきます。古尾谷さんから，そういうご依頼を受けたのですが，私は大学へ2001年に移りましたから，もう11年目になりますが，教務関係の仕事をしたことがありません。ですから，こういうところでお話をする資格もあまりないと思いますが，私は今の話にもありましたように，奈良女子大学と奈良文化財研究所の連携の中に身を置いたことが1つのきっかけにもなり，奈文研から奈良女子大学に職場が移りました。その辺りの経験を踏まえてお話しさせていただきます。あるいは，21世紀 COE プログラムの中での連携の話などもご紹介させていただきたいと思っております。一応，タイトルは「大学院教育における地域連携」としましたが，研究活動の面での連携も後半にお話しします。

ただし，例えばこの授業にはどれくらいの人数が登録したかなど，細かいところを調べてくるべきだったのでしょうが，その余裕がなかったので，細かい数字等のない話になってしまいます。それを最初にお断りさせていただきたいと思います。それでは，早速，話をさせていただきます。資料を御覧いただきながら，お聞き下さい。

## はじめに

言うまでもなく，奈良は古代以来の歴史が豊かな土

地です。そのため，今も独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所（今後は奈文研と言わせていただきます），同じく文化財機構の奈良国立博物館（これも奈良博と言わせていただきます），あるいは宮内庁正倉院事務所のような独立行政法人や国の機関，さらに県立橿原考古学研究所，また財団法人元興寺文化財研究所，それに各市町村の教育委員会など，多くの文化財調査・研究機関が存在します。今，ここでは特に文化財関係を挙げましたが，そのほかにも県立美術館や，県立万葉文化館という万葉集に特化したミュージアムもあります。そういった多くの調査・研究機関と，大学側としては積極的に教育・研究上の連携を築いて，そこに大学の特色の見出すというような方策をこの間ずっと取ってきました。

やはり奈良は，古代の中心地であったということから，大学としても特に文学部の場合には，古代というものを一つの売りにしているところがあります。私が属しているのは人文社会学科の古代文化学コースです。以前は古代文化地域学講座と言いましたが，今は講座制はやめて，学生の履修のためのコース制にしていますので，われわれの所属は人文社会学科という学科どまりになっています。とにかく古代文化地域学講座という，古代に軸足を置いて教育・研究する講座を，私が大学に移る前，1995年度に作りました。

ただ，古代文化と言いましても，実際には，例えば日本の古代史をやっているのは，私 1 人です。私が来る前も，やはり日本古代史の教員は 1 人しかいませんでした。教員の分野としては日本古代史，中国古代史，考古学，歴史地理学，美術史学，それに文化人類学の 6 人の教員でした。これが古代文化地域学講座です。その後，2008年度から改組し，講座専攻制をやめてコース制になったときには，その中の文化人類学の人が別のコースに移りましたので，現在では，日本と中国の古代史と，考古学と歴史地理学と美術史の 5 人のスタッフから成っています。それぞれ，いわば違う分野を研究している人たちですので，その中で全体が 1 つになって何か研究をするというようなことはなかなか難しいですし，学生にもなるべく複数の先生の授業をとるようにとは言っていますが，現実には，その中のどれか 1 つ分野を選んで卒論を書くということになります。そういった問題はありますが，文学部の中でも，古代というものを大学の特色に据えるということをしているわけであります。それは大学院についても同じようなことが言えますので，そういう面での大学院における地域連携を，少しお話しさせていただきたいと思います。

## 1．大学院博士後期課程の教育における地域連携

### 1）大学院人間文化研究科の歴史

最初に，大学院人間文化研究科の歴史を簡単に申しておきますと，1960年代から大学院では修士課程が発足しました。当時，家政学部，理学部，文学部の 3 つの学部がありましたが，それぞれの修士課程が，60年代に順次できていきました。1980年度になり，その中の文学研究科に比較文化学専攻という博士課程が発足します。翌年に博士後期課程のみの大学院人間文化研究科が作られました。そこでは比較文化学専攻と，生活環境学専攻の 2 つの専攻が置かれたわけです。比較文化学専攻は先ほど言いましたように，80年度に文学研究科の中にできていたわけですが，それが移って人間文化学研究科のほうに入ったということです。そして比較文化学専攻の中には，社会文化論講座という，社会学や哲学・史学・地理学などの分野と，言語文化論講座という，国語・国文学などの分野の講座とが設けられました。

そして17年間この体制が続き，98年度になって大学院の修士課程と博士課程が一本化され， 5 年制の博士前期・後期課程の人間文化研究科が発足します。博士前期課程は10専攻，博士後期課程には先の比較文化学専攻・生活環境学専攻に加えて，複合領域科学専攻が作られて 3 つの専攻になりました。ところが，翌年度には先行していた 2 つの専攻が改組され，名前は同じですが比較文化学専攻と，人間環境科学専攻となり，前年に出来上がった専攻とともに 3 専攻になりました。さらに2003年度には比較文化学専攻を除いた 2 つの専攻が統廃合され，社会生活環境学専攻・共生

自然科学専攻・複合現象科学専攻というものになり，比較文化学専攻とともに4つの専攻に，現在はなっております。

### 2）比較文化学専攻

私が属しておりますのは，比較文化学専攻です。比較文化学専攻は3つの講座から成り立っています。文化史論講座，日本アジア文化情報学講座，欧米地域文化情報学講座という3講座で，学生定員は12名です。私はその中の文化史論講座に属していますが，日本史・東洋史・西洋史・考古学・比較民族文化論等，主に歴史関係にかかわるような教員からなる講座です。そこに独立行政法人の奈文研から3名の客員教授を迎えています。もう1つの日本アジア文化情報学講座は国語・国文学と中国語・中国文学を基礎とする文化の研究をしている教員たちと，独立行政法人奈良国立博物館と宮内庁正倉院事務所から各1名の客員教員を迎えています。詳しいことは後ほど申します。もう1つの欧米地域文化情報学講座は，欧米の言語文化の研究を行なっているところです。

資料に載せた比較文化学専攻の紹介はホームページにあるものですが，「歴史都市奈良において研究するところの利点」として，「個別の学問領域において豊かな歴史資料に接近することが容易である」ということ，「また同時に日本アジアと欧米の両文化を比較文化論の視点から分析することを可能にしてくれる点に」あるということや，「本専攻では文化を情報として扱う視点を重視して」というようなことを言っております。また，専攻の基本理念の中でも，これは一部を載せただけですが，「古代・奈良を基本的視座として，アジアおよび欧米の諸文化との比較研究の上に」云々と述べています。あるいは，文化史論講座の紹介の中でも，「近隣の奈良文化財研究所・奈良国立博物館・正倉院事務所等の研究者や機関と交流し，古代・奈良を起点として諸文化を国際的に比較するという視点から研究を進めることのできる，他大学には見られない独自な講座です。奈良という地の利を生かし，実地に即した比較を通して歴史＝文化を作ってきた「人間」の総体的な理解を目指しています。」と述べて，古代・奈良ということを繰り返し強調しています。

### 3）比較文化学専攻における連携・協力協定

さて，今見ましたような，少し飾った文章よりも，むしろ具体的にどういう連携をしているかということのほうが大事かと思います。これにつきましては，実際の協定書と，それに基づく覚書をご覧いただきながら，お聞きいただければと思います。奈文研・奈良博・正倉院事務所と，それぞれ1999（平成11）年3月31日に「奈良女子大学大学院人間文化研究科における連携・協力に関する協定書」及び「同協定書に基づく覚書」というものを締結し，翌日の4月1日からこれを実施して，それらの機関から教員を迎えているところです。

具体的な中身を見ていきますと，まず，奈良文化財研究所との協定書の第1条（連携・協力講座）に，「大学と奈文研が連携・協力する分野は，研究科博士後期課程比較文化学専攻文化史論講座とする」とあります。先ほど申しましたように，私が属している文化史論講座が奈文研との連携・協力分野になっています。第2条（併任教員）では，「大学は，奈文研との協議に基づき，奈文研の研究員を教授または助教授に併任する」としています。これは併任なのです。そして第3条（教育研究）に「併任教員は，大学の規定に基づき協力研究を行う」，第4条（研究費等）で，「併任教員の教官当積算校費，教官研究旅費及び学生当積算校費は，研究科の管理・運営に要する経費を除き，研究科において配分する」としております。あとは，細かいことですので，省略します。

次にこの協定書に基づく覚書ですが，第1条（併任教員）に「併任教員の任用期間は1年とし，年度ごとに更新するものとする」とあります。基本的に何か事情がない限り継続されますが，一応任期は1年ということになっています。第2条では，「併任教員は，研究科会議の構成員となる」となっています。ですから教授会，具体的には比較文化学専攻会議のメンバーということになります。ただし現実には出席されず，委任状を提出されています。

次に教育研究という第3条。これが重要なところです。「教育を行う場所については，原則として，講義は大学とし，演習，実験・実習及び研究指導は奈文研とする」と書いてあります。講義の場合は大学ですが，演習，実験・実習，研究指導は奈文研で行なうということになっているわけです。具体的なことは，また後ほど申します。それに伴って奈文研で必要とする施設・設備の使用料や光熱水費は，奈文研が負担するということや，あるいは必要な物品は大学のほうで調達して，奈文研に持ち込むことができるなどの細かいことを，第4条以下で規定しています。これが奈文研との関係であります。

次に奈良博との協定書を載せておきました。これは

基本的に正倉院も同じですので，奈良博だけにとどめました。まず第1条で「大学と博物館が連携・協力する分野は，研究科博士後期課程比較文化学専攻日本アジア文化情報学講座とする」となっております。こちらの窓口は日本アジア文化情報学講座です。正倉院も同じです。それから第2条で「大学は，博物館との協議に基づき，博物館の研究員を非常勤の教員に任用する」とあります。ここが先ほどの奈文研と大きく違うところで，こちらは非常勤講師の扱いということになります。ただし，第3条で「大学は，前項の教員に対し，客員教授または客員助教授の称号を付与する」と規定するように，扱いは非常勤なのですが，一般的な非常勤講師ではなく，客員教員とするのです。第4条は「客員教授等は大学の規定に基づき協力研究を行う」というものです。

これに関する覚書は省略しましたが，任用を年度ごとに更新するのは奈文研と一緒です。また，「客員教員は，専攻会議等に出席することができる」とありますが，これも現実には出席されていません。また，もう1つ奈文研の場合と大きく違うのは，教育を行なう場所は原則として大学であるとしていることです。同じように連携・協力に関する協定書を結んでおりますが，実際の運用では，奈文研と奈良博・正倉院との間に違いがあるのです。

先ほど申しましたように，この大学との協定に基づきまして，私は奈文研時代の1999年4月から，当時は奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部の史料調査室長というポストにおりましたが，奈良女子大学大学院の併任教授にもなったわけです。私がそこでどのような授業をしたかということは，また後ほど紹介することにします。

実は奈文研は，奈良女と協定を結ぶ以前に，京大とも結んでいました。京大大学院の人間・環境学研究科とも連携しており，奈文研から6名の客員教員を出していて，実際に大学院生が奈文研に来て，そこで教育指導を受けるというようなことをしていたわけです。そこでは考古学や保存科学，建築史学などの関係の人が客員教員になっています。奈文研としては，そういう京大との経験，実績があり，その上で奈良女とも結んだことになります。これにつきましては，奈文研はもともと国の機関だったものが，2001（平成13）年から独立行政法人になったわけですが，協定締結当時，奈文研としては独法化後に，組織がどうなるのか，生き残れるのかという危機感を持っていましたので，恐らく独法化後をにらんで，引き続き地域連携や，大学との提携を行なうという選択したのだと思います。奈文研はもともと研究機関であって教育機関ではないわけですが，そこが京大や奈良女子大と提携を結んだということは，奈文研の歴史にとっても一つの大きな転機であったと思います。

さて奈文研の場合は，併任教授・助教授です。もっとも併任というのは，この協定を結んだときはどちらも国立の機関でしたので，併任となりましたが，2001年に奈文研が独法化，そして2004年に大学が独法化すると，2004年4月に協定を結び直して，名称変更を行なっています。新協定書は省略しましたが，第2条（客員教授等）は「大学は，奈文研との協議に基づき，奈文研の研究員に客員教授又は客員助教授（以下「客員教授等」という。）の称号を付与する」と文言が変わっており，客員教授・助教授（今は准教授）となりました。この新協定はその他，旧協定での「奈良国立文化財研究所」の名称を「独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所」とし，また奈文研側の協定締結者を「独立行政法人文化財研究所理事長」とするなど，独法化に伴う変化や，若干の文言の改定がありますが，実質的な内容は変わっておりません。

ちなみに教授，准教授の違いは，それになった人の奈文研におけるポストを基準にしております。奈文研では，私のいたときですと平城宮跡発掘調査部，今は都城発掘調査部というものがあり，その下にいくつもの，私のときには○○調査室，今は○○研究室というものがあり，部長，室長，主任研究員，その下に普通の研究員がいますが，室長以上のポストの人を迎えたときには教授とするという目途でやっております。

また先ほど申しましたように，もともと奈文研の場合は併任であり，奈良博と正倉院は客員として非常勤です。この違いにより，この方たちに支払うお金も違っております。奈文研の人には，研究費をお渡しし，博物館と正倉院の方たちには非常勤講師代をお支払いしております。これについては，2004年の奈文研との新協定に伴う覚書では，新たな条文が加わっています。それは第3条で，「大学は客員教授等に対し，給与を支給しないものとする」となっていて，上記のことを明記したわけです。

### 4）客員教員の授業内容（シラバスより）

次に客員教員の方たちが実際にどういう授業をされているかを，少しご紹介したいと思います。そこにこの制度の特徴がよく現れていると思いますので，シラバスから拾ってきました。①は授業の概要，②学習・

教育目標，③授業計画，それから④成績評価方法，⑤備考です。

まず奈良文化財研究所からの客員教員として，都城発掘調査部の史料研究室長をされている日本史のA先生が，「歴史資料論Ⅰ・Ⅱ」を担当されています。前期がⅠ，後期がⅡですね。少し読んでみますと，授業の概要は，「文献史料だけでなく多様な資料が歴史資料として注目されるようになってきた今日，従来の枠組みにとらわれない新しい歴史資料論が必要になってきた。中でも考古学による調査成果，特に木簡，漆紙文書，墨書土器などの出土文字資料が歴史資料に占める位置づけは格段に大きくなってきている。このような新しい歴史資料を視野に入れながら，生の史料による新しい日本史の歴史資料論の構築を目指す」とあります。

②学習・教育目標の中では，「木簡を中心とする奈良時代の史料の取り扱いに慣れ，古代の文字や情報伝達媒体の特質を理解する」とあります。それから③の具体的な授業計画の中では，第2回目から第15回目では「平城宮・京跡から出土した木簡を中心とする出土文字資料の解読を参加者全員で進める。一括性の高い木簡群を取り上げ，削屑まで含めた全体像の把握に努める予定」で，「具体的に取り上げる資料は，参加者の問題関心を聞いた上で決めたい」とされています。それから，もう1つ，「授業参加者の専門分野や関心に基づいて，古代の文字資料に関する自由な報告を求め，参加者全員で討議する」となっています。そして④成績評価は，基本的には平常点で決めるということです。

こういうように，A先生のおられる史料研究室は，私や古尾谷さんも以前に所属していた部屋ですが，木簡を中心とする出土文字資料を扱う部屋ですので，そこで実際に調査・研究にあたっている木簡を使った授業を行なっておられます。実際に発掘で見つかった木簡そのものを対象にして，それに一体どういう字が書かれているのか，あるいは，それの意味は何かというようなことを，直接実物を前にして行なうという授業です。私が99年に併任教授になったときもそういうことをしました。そのときには昔，出土した木簡で，既に保存処理をしている木簡を中心にして，もう一遍，最新の機械を使って読み直しました。何十年も前には，木簡にどういう字が書かれているかということはほとんど肉眼に頼っていたのですが，最近では赤外線テレビ等の機器を使えば，当時読めなかった文字も読めるようになっていますので，それを学生と一緒にもう一度読み直す作業を行ないました。その成果はかつての報告書の訂正というかたちで公表しています。そういうことをA先生もされているということです。

その次に，B先生の「文化財学の諸問題Ⅰ・Ⅱ」です。B先生は考古学の方で，都城発掘調査部の考古第一研究室長をされています。①だけ読んでおきますと，「古代律令制の成立ならびに展開過程における，手工業の実態と変遷を明確にし，その歴史的偉業を追究することをめざす。そのために発掘調査資料や関係論文などを用い，関連する周辺諸科学の成果などを視野に入れながら，関係する史料や古文書類なども取り上げ，幅広く総合的に検討を進め，主に演習形式で行う。また単に資・史料や論文を検討するだけでなく，実験的な形式の演習を行うと共に受講生の研究発表も行う」とあります。②の太字のところにも「古代手工業生産における「もの作り」の具体的な様相を理解し」云々とあります。このB先生は考古学の中でも金属を扱い，ご本人は冶金考古学と言っておられますが，そういうことを専門にされている方です。その授業の中では，実際に金属を精錬するという実験もされたりしています。

次はC先生の「歴史考古学特論Ⅰ・Ⅱ」です。C先生は前任者との交代に伴って今年度からお願いをしており，都城発掘調査部長をされている方です。これも①を少し読んでみますと，「特に奈良には，飛鳥・奈良時代の工芸品が集中して残っている。これらの内のいくつかを選び出して，その歴史的な位置づけとその製作技術やその背景となる彼らの知識について考える。考古学資料では，主に弥生時代などに視座を据えることにし，またその技術と活用法は，奈良や京都などの伝統工芸にかかわる現代の職人を訪ねて調査しこれを参考にする」とあり，③のところで「前半，後半を通じて，染色，木工，陶芸等からいくつか具体的なテーマを設定する」とあります。もともと弥生時代の土器を専門にされている方ですが，最近は染色なども研究テーマにされていますので，やはりご自分の専門とされている内容で授業を行なうことを目指しているわけです。

このように3人，日本史1人と考古学2人，いずれも客員教授を奈文研からお迎えしています。ちなみに，こういった客員教員を出していることについて，奈文研側の自己評価として，奈文研のホームページで，「いずれも，飛鳥地域，藤原宮・京跡，平城宮・京跡などの遺跡の発掘調査，坩堝や羽口，木製品，木簡をはじめとする遺物の調査研究に密着した授業であ

り，大学における通常の授業では経験できない，奈文研ならではの特色ある教育を実践した」と述べられています。

次に，奈良博からの客員教員です。「日本アジア古典資料論Ⅰ」は日本史のD先生で，客員准教授です。①に，「日本では仏教が伝わって以来，脈々と写経がおこなわれてきた。そして，奈良時代以降に作成された写経遺品は，実数を把握できないほど数多く伝えられている。写経には仏典テキストそのもののほかに，古典資料研究に資する様々な情報が残されている。奥書・識語・書き込みなどの文字情報や，表紙・緒・軸といった形態的要素がそれに当たる。授業では，このうち文字情報に注目し，代表的な写経識語を古い時期のものから読み進め，日本の写経の概要と特質について論じる」とあるように，写経の奥に，どういう理由で誰が写経したかという書き込みがありますが，その部分を読んでいくということをされています。これが前期です。

後期は「日本アジア古典資料論Ⅱ」です。もう読みませんが，仏像，仏具などの造形品に記された文章，銘文ですが，こういったものなどにも注目し，当面は写経の識語と梵鐘の銘文を取り上げるということです。奈良博は，現物としての経典をたくさん所蔵されていますが，授業は奈良博の方の場合は大学でやりますから，それを持ってくるというわけにはいきませんので，写真版などを使って，それを読む，あるいは解説をされています。それから授業の中で，奈良博に見学に行くということもされています。

最後は正倉院事務所からの客員教員による「日本アジア文献資料論Ⅰ・Ⅱ」です。正倉院事務所長をされている古代史のE先生です。①授業の概要は，「日本古代の重要な文献史料である正倉院文書を主たる素材に，東アジア古代社会において，「文字を使用してしごとを行う」ことの意味を視野に入れながら，文字資料から何を読み取ることができ，いかなる歴史像を構築しうるかをテーマに授業を行う」というものです。E先生が，ご自身の研究テーマとされている正倉院文書を読んでいかれています。ただし，もちろん正倉院文書を大学に持ってくることはできませんので，写真版を使って，それを読まれています。

以上のように，奈文研の方も奈良博の方も正倉院事務所の方も，ご自身が研究テーマとされているモノに即した授業をされているわけです。特に奈文研の場合は，木簡の現物を目の前にしての授業を受けられます。これは極めてぜいたくな授業だと言えるかと思います。日本全体を見わたしても，現物の木簡を使った授業などは，多分奈良女だけでしょう。基本的に，そういうものは発掘調査機関にあるわけですから，実際にそれを扱う人から直接教えてもらえるというのは，奈良女くらいだと思います。それは正倉院文書にしろ，写経関係史料にしても同じだと思います。このように学生にとっては，非常にぜいたくな授業であると思います。

### 5）自己評価

こういう授業について，大学としてはどう自己評価しているかということについては，2001年の『奈良女子大学大学院の現状と課題』（大学院人間文化研究科　自己点検・評価報告書）の比較文化学専攻の個所で，「併任・客員教官を配置することによって，奈良国立文化財研究所・奈良国立博物館・宮内庁正倉院事務所と連携し，旧来の閉じられた学問からの脱皮を実現している」とし，その中で私が属している文化史論講座の所でも，「古代奈良を基本的視座に据えて，それとの関係性のなかで諸文化の歴史的かつ構造的比較をとおして，新しい日本のアイデンティティを確立していこうという目論見も，（中略）学外諸機関との連携によって，いっそう確実なものになってきている」というように，深めた表現ではないですが，肯定的な評価をしております。

## 2．大学院博士前期課程の教育における地域連携

次に大学院博士前期課程における地域連携についても，少しご報告したいと思います。ただ，こちらは私自身がかかわっていないので，正確に伝えられるかどうか心許ないところがあるのですが，1つだけご紹介します。それは文科省の行なっている「組織的な大学院教育改革推進プログラム（大学院GP）」に，「女性の高度な職業能力を開発する実践的教育」が，2008（平成20）年度に採択され，2010年度まで行なわれました。これが終了した今年度も，大学の独自事業として引き続き行なっています。それは「男女共同参画社会をリードする女性高度専門職業人の養成を念頭に，主として博士前期課程の教育の実質化を図る」ことをめざすものです。「このプログラムでは，特に高度専門職業人の養成を念頭に，主として博士前期課程の教育の実質化を図るために，従来なかった実践的な授業科目をカリキュラムに取り入れ，キャリア形成を支援

します」というものです。対象になる専攻の中に国際社会文化学専攻があります。現在では，文学部の人文社会学科の上に，そのまま乗っている博士前期課程の専攻です。遠からず人文社会学専攻と名前を変える計画を持っています。

その中に，実践基礎群科目，実践応用群科目など，いろいろな科目を用意しているのですが，インターンシップをいくつか実施しております。そのうち国際社会文化学専攻が用意している「インターンシップ専門実習」は，奈文研との提携の上に成り立っていますので，それを少し紹介します。シラバスを見ますと，授業の概要は，「文化遺産を対象とする研究調査の現場（奈文研）での，専門的・実践的実習を通じて，研究調査への学問の応用と実践的な技術及び研究調査成果の社会への還元の可能性について理解を深めさせ，修了後に社会において文化財保護等に貢献できる資質を養う」というものです。学習・教育目標は，「研究調査への学問の応用に理解を深めるとともに，実践的な技術を習得・理解する。また，研究調査成果の社会への還元についても理解を深め，修了後に社会において文化財保護等に貢献できる資質を身につける」とあります。授業計画は，１回目はオリエンテーションで，その後，専門実習として測量，発掘調査，遺物整理，実測，報告書の作成などを行ない，最後に実習内容をまとめるとなっています。

備考のところに，「ある程度の基礎的経験が必要ですので，受講予定者は事前に連絡して下さい」とあります。これについては，また後で紹介するとして，その前に，このインターンシップ専門実習を行なうに当たり，奈文研にお願いして，協定書を結びました。それを見ますと，目的は第１条に「甲（＝奈良女）は，正規の教育課程におけるインターンシップ専門実習について，乙（＝奈文研）との連携により実習を実施し，甲の博士前期課程の学生に，文化遺産を対象とする研究調査の現場を経験させ，研究調査への学問の応用と実践的な技術及び研究調査成果の社会への還元の可能性について理解を深めさせ，教育効果を高めるとともに，修了後に社会において文化財保護等に貢献することを目的とする」としています。これを行なうために第２条で，学生を実習生として派遣しますが，その人数や実習期間は両者で協議して決める，としています。第３条では，奈文研はあらかじめ実習計画書を作ること，そして２項で奈文研は，「実習計画の作成にあたって，実習期間中における実習の総時間数が30時間を下回らないよう考慮する」としています。具体的には第６条に，「実習時間は，原則として１日７時間45分以内，週38時間45分を超えないものとする」とあるように，５日間，要するに１週間行なうということです。あとは第８条，「実習生の実習に対する報酬は，原則として無償とする」など，細かいがあります。この協定書を2009（平成21）年の３月31日に，奈良女子大学大学院人間文化研究科長と奈文研の所長との間で結びました。そして2010年度から実施しました。

次に，この大学院 GP 授業の実施記録を見て下さい。2010年度の記録の「授業の経過」を見ていただくと，７月６日にガイダンスを行なって，実習のスケジュールや注意事項について説明をしています。それから１カ月後の８月になって，いよいよ具体的なことが始まります。８月９日に平城宮跡の発掘現場で調査の概要を聞いたのちに，遺構の実測や，そのときに作る図面や遺構カードの作成について実習を行なっています。それから遺構検出作業を見学しました。10日にも，引き続き発掘現場に行き，遺構検出の実習を行なっています。８月11日から13日までは，現場ではなくて，それぞれの研究室等で講義を受けております。その中で，例えば８月11日には，奈文研そのものについての説明や，平城京の保存，アンコール・ワットなどの海外調査についての講義がありました。それから，木器・金属器・石器の収蔵庫の見学や，考古第一研究室長による冶金考古学を中心とする研究の最前線に関する講義があったのですが，この方は客員教授をしていただいている方です。このように，マスターにおけるインターンシップの中でも，ドクターにおける客員教授の方たちが，中心になって活躍していただいています。

この年の受講登録者は３名でした。これは，先程紹介したシラバスの備考に，「ある程度の基礎的経験が必要ですので，受講予定者は事前に連絡して下さい」とありますように，１週間奈文研に学生の面倒を見ていただくとなると，奈文研の負担が大きくなるわけですから，こちらもなるべくご負担を掛けないように，受講生を奈文研などでの発掘や遺物整理などのアルバイトを経験した学生に限ろうとした結果，少なくなったのです。しかし今年度は奈文研は，経験の有無とは関係なしに10人を，２回に分けて受け入れていただけるそうです。奈文研もずいぶん積極的に，これを位置付けていただいているようです。

このインターンシップの成果あるいは学生の反応・改善点の項には，「奈文研の配慮の行き届いた多岐に

わたる有意義な実習であった。平城宮内の実際の発掘現場における複雑な切合い関係の柱穴の検出作業をはじめ，奈文研ならではの高度な技術に接した体験や，その実習及び最新の知識・知見に触れる諸講義は，大変勉強になったと学生に好評であり，通常の行政発掘では学ぶことのできない様々な調査研究の最新成果にも触れることができた意義は大きいようである。」とあります。さらに，この報告書に載っていた学生のアンケートも下に引いておきました。「奈文研ということで考古学の中央での体験はとても勉強になって，これからの進路や研究に役立ったと思う」，「実際に研究職（専門職）として働いている方の話を聞くことができ，将来のイメージをつかむ参考になったと思う」というように，積極的な評価をしてくれています。

ところで先程のものと同じ「女性の高度な職業能力を開発する実践的教育」の中に「文化史総合演習」という授業があるのですが，最近少し面白い活動をしましたので，紹介しておきます。それは，古代の甘味料に「甘葛煎（アマズラセン）」というものがあるのですが，ツタから採った樹液を煮詰めてそれを作るという実験をしたのです。奈良ということにかかわって，古代のお菓子にどのようなものがあるかというようなことを授業で取り上げ，その延長として甘葛煎を復元してみようとしたのです。甘葛煎は古代の史料にはよく出てくるのですが，どうやって作るのかはよく分からないものなのです。ところが九州にそのことを研究されておられる方がいたので，その方をお呼びして，その方の指導も受けて，学内のあちこちに生えていたツタを切ってきて，ツタの中から本当にごくわずかに出てくる樹液を集めました。切ったツタを吹くと樹液が出てくるのですが，直接口を付けると唇が荒れるので，自転車のチューブをツタにはめて，空気入れを使うこともしました。この様子は『古代の甘味料“甘葛煎”の復元――菓子の文化史――』（「文化史総合演習」・「Web 情報実習」授業成果報告会報告書）（2011年）という報告書にもなりましたし，その授業の中に「Web 情報実習」もあるので，この成果を大学のホームページで Web 発信しているところです。また甘葛煎を実際に作っている様子は，大阪の朝日放送テレビでも取り上げられました。

以上が，ドクターあるいはマスターにおける地域連携，特に文化財関係機関との連携の内容であります。もちろん，学部段階でもさまざまなかたちでの，地域連携もしております。例えば，「なら学プロジェクト」という，奈良にかかわるさまざまな分野の研究・教育・地域貢献を行なっているプロジェクトがあります。授業にも「なら学概論」というものがあり，いろいろな分野の方たちが，それぞれの立場から奈良にかかわる授業を行なっており，私も 1 コマ持っています。受講生は 1 回生，2 回生あたりが中心です。そしてまた，奈良にかかわる内容の卒論・修論を書いた人たちの発表会を，国宝になっている元興寺禅室で行ない，地域の方たちがそれを聞きに来られるというような活動もあります。

## 3．研究活動における地域連携

### 1）21世紀 COE プログラム（革新的学術分野）2004年度～2008年度

今度は研究活動における地域連携を紹介したいと思います。私がかかわった21世紀 COE プログラム（革新的学術分野）です。それに「古代日本形成の特質解明の研究教育拠点」として応募しましたところ採択され，2004（平成16）年度から2008年度までの 5 年間行ないました。そこでは，博士後期課程の文化史論講座の方たちが中心になり，さらにそれ以外の方たちも含めて，拠点を作りました。次に書きましたように，「考古学・歴史学・国語学・国文学・地理学・建築史学・生活文化史学などの諸学の統合により，奈良という地理的特徴を生かして古代日本の形成過程とその特質を解明し，古代学を体系化することをめざ」して，研究をしようとしたわけです。そのときには，大学が平城京に立地しているということもあり，都城に代表される「古代都市」をキーワードにして，東アジア的な視野を持って研究をしようとしました。小さい大学ですので，大学中の古代にかかわる研究をしている人たちを集めて拠点を作ったのです。

しかし古代，あるいは都城の研究をしようと思うと，大学だけでは研究は完結できません。例えば，平城京ということであるなら，発掘調査による研究成果の蓄積が大きいわけですが，大学ではそういうものを持っていません。それらを持っていて研究しているのは，やはり奈文研や県立橿原考古学研究所，あるいは奈良市教育委員会等の発掘調査機関です。また，言語や文学研究をしようとすると，正倉院文書の意味が大きいのですが，それは正倉院事務所が所蔵・研究しています。あるいは各種の文化財を所蔵・研究している機関としては，それらのほかに博物館があります。そこで，大学として拠点を作る際に，そういう文化財調査・研究機関の協力を求めるしかないのです。それま

でにも，大学側としては客員教員をお迎えしていたという実績があるので，それらの機関にお願いをして，客員教員を拠点のメンバーにお迎えしました。こうして拠点には，奈文研・奈良博・正倉院事務所の3つの機関の方たちが加わり，さらに他大学の方にも特任教授というかたちで入っていただきました。

実績報告書を読みましょう。「本拠点は本事業の開始前までは相互連携が必ずしも十分ではなかった近隣の，（中略）研究機関との間に，古代都城制や古代日本語をめぐって，共同研究者・研究協力者・研究会・シンポジウム・講座の共催などの多様な形で，緊密な協力関係を築き研究の推進を図った」。そして諸機関から「拠点形成以前からの教育連携の上に，本拠点メンバーとして研究者を迎えた」ということ，さらに国際的にも研究連携をとったところがあり，最後の段落ですが，「このような活動を通じて，本拠点は古代日本に関わる国内外を通じた研究教育連携拠点として立ち上がり，今後もその役割を果たし続けていく基盤ができた」と，述べています。いろいろな文化財関係機関は，それぞれ独自の役割を持っており，いずれも重要な研究をしていますが，相互に連携し協力して一つのことを研究するということはなかったので，それらのつなぎ役に大学がなることをめざしたわけです。

連携の具体的な内容としては，以下のようなことがあります。1つ目は，拠点メンバーにそういう機関から人を迎えたということ。2つ目は，研究会やシンポジウムを共催する，あるいは所属の研究者に研究報告をしていただく。3つ目は，大学のホームページで公開していますので，関心のおありの方はご覧いただきたいと思うのですが，GIS（地理情報システム）を用いた「奈良盆地歴史地理データベース」というものを作りました。これはいくつかのデータベースから構成されていますが，そのうちの「小字データベース」は，奈良盆地の小字のデータベースで，地図上で小字を検索することができます。情報量が大きすぎて，検索は今のところ大字レベルを経てしかできないのですが。これは橿原考古学研究所が作った『大和国条里復原図』などのデータに基づいて，作っております。このほか奈文研などの発掘データに基づいて，「藤原京遺構データベース」というものも作っています。このように連携した諸機関の資料等によって，GISを使ったデータベースを作製しました。

また，国語・国文学分野を中心に，若手研究者支援プログラムというものを，毎年夏に3日間にわたって開催しています。若手の研究者を育成する，その人たちの研究を支援するような講座あるいはシンポジウムです。それは，万葉古代学研究所，あるいは県立万葉文化館と共催です。これはCOE終了後も継続して行なっています。もう1つ，COEの中で始まり今も続いていることとして，奈良博の夏季講座を大学が共催しております。

これらの活動によって，COEは事後評価で，「設定された目的は十分達成された」という評価をいただき，そのコメントの中でも，「大学内部に留まらず，他の研究機関との共同研究においても極めて積極的であったと評価できる」と評価されたところです。

### 2）古代学学術研究センター

最後に，古代学学術研究センターについてお話しします。これは，COE発足以前から，準備室という形であったのですが，COEの終了後にその活動を継承・発展させる組織として，2005年に正式に発足しました。東アジアという広い視野の中で，日本古代の歴史・文学・言語などを，学際的に研究する機関です。ですから，ここがCOEの活動を今でも継承して，データベース作製や若手研究者支援プログラムや都城制研究集会の開催など，いろいろなことをしております。COE終了後には，それまでの文系的な研究に加えて，理系の研究者も加わり，環境歴史科学創成分野というものを作っております。具体的なことは後ほど申します。

このセンターのメンバーもCOEを引き継いでおりまして，大学のOB及び学外の奈良博・橿原考古学研究所・元興寺文化財研究所，この3機関から特任教授を迎えております。それから，もともと客員教授をお願いしている奈文研の1人，正倉院の1人に，そのまま学内メンバーとして本センターのメンバーに加わっていただいています。

奈良博・橿考研・元興寺文化財研究所から特任教授をお迎えしたのは，特に環境歴史科学創成分野を担っていただくためです。それはどういうことかと言いますと，「古代史・環境史プロテオミクス研究創成事業」というものが，2009年度に概算要求が通り，プロテオミクス，つまりタンパク質の分析を行なう機器を購入することができました。タンパク質の分析というのは，普通は医学・薬学の分野で行なうものですが，医学部も薬学部もない奈良女で，どうして分析機器の導入が可能であったかというと，COEと同じく奈良の古代ということを生かした研究計画を立てたためです。要は文化財や出土した遺物に含まれているタンパ

ク質を分析することによって，古代の環境や，もの作りがどうやって行なわれたのかということを研究しようというプロジェクトです。この研究を古代学学術研究センターと，それを実施している研究創成事業本部という所が連携して行なっております。そしてこれを実施するには，分析する資料を有し，それへの研究を蓄積されている機関との連携が必要なので，これらの機関から人をお迎えしたのです。

そういう中で特に，奈文研と「平城宮・京跡等出土のタンパク質含有資料に関する考古科学的研究」を行なうという連携研究協定を，2010年に結びました。それは具体的には平城宮・京跡などで出土した古代の遺物や，膠を材料に用いる墨などに含まれるタンパク質の科学的分析を行ない，古代における動物利用の実態とその技術的基盤を解明しようとするものです。これにより奈良女子大が行なう古代史・環境史プロテオミクス研究創成事業と，奈良文化財研究所の行なう文化財調査の推進を図ろうということで，学長と研究所長との間で協定を締結して，現在，分析を行なっているところです。

以上，長くなってしまいましたが，私が知っている範囲内での，特に文化財関係での奈良にある諸機関との連携の様子をご紹介しました。最後に少し問題点も紹介したいと思います。先ほどから何回も言いますように，奈良女子大という，地方の小さい大学がいかにして特色を出すかというときに，研究にしろ，教育にしろ，古代・奈良に特徴を見出していこうとしています。それには，周辺の諸機関との連携はどうしても欠かせません。そしてそれができているわけですから，これは大学からすれば，大変ありがたいことではあります。

ただし，いくつか問題はあります。それは，例えば，相手側にとってみるとどこまで利点があるかという問題です。私も奈文研にいたときに併任教授になりましたが，本務が忙しい中で，毎週1回授業を行なう，研究指導を行なうということは，大きな負担になってくるわけです。特に奈文研はそのときに比べても，ずいぶんと定員が減らされています。発掘の現場班は，歴史学や考古学や建築史学など，いろいろな分野の人が集まって1つのチームを作っているのですが，私のいたときは6人で1チームでした。それが，定員が少なくなっていく中で，今は4人くらいしかいないと思います。そうした中で，授業をするのは大変大きな負担だと思います。それに奈文研の場合，客員教授に室長クラスの方が多くなっていますが，これらの人たちには，現場以外にも調査部を動かしていくマネジメントの仕事が当番であり，それに1月半とか2月とかの長い時間を取られますから，余計負担が大きいわけです。ですから，現実には授業時間をフレキシブルにするような対応も行なわれています。

それから，何より問題なのは，大学院生の数が非常に少ないということです。どこの大学でも苦しいのでしょうが，大学院生の定員確保ということがなかなか難しくなっているところがあります。例えば，奈文研の客員教授は3人で，2人が考古，1人が古代史なのですが，今現在，ドクターコースで考古学を専攻している院生は1人もいません。ですから，メニューはあってもそれを受ける人がいないということも，現実には起こっています。もちろん，考古学の方の授業を，考古学でない他分野の院生が受講するということもありますが，シラバスにメニューは載っているけれど開講されないとか，受講生が1人しかいないとかいうことも出てくるわけです。そういうわけで，大変もったいないことになっています。現在の学生の状況を考えると，日本史の客員教員を増やす，あるいはほかの分野の方を迎えるという方策もあるでしょうが，奈文研内部の都合もあり，なかなかそうもいかないだろうと思います。

このように，こちらの大学として求めるものは大変大きいし，ありがたいのですが，相手の機関からすると，やはり負担になっている面が大きいのではないかと思います。特にマスターのインターンシップは，今年は2回受け入れていただけるということですが，経験の有無にかかわらず学生を受け入れるとなると，それだけ現場にも負担になり，また，現場以外の講義でも負担をかけるだろうと思います。それにもかかわらず積極的にしていただいているのは，奈文研も大学との連携，地域連携を行なって，生き残りをかけているのではないか，負担ではあるけれども，そういうところで我慢していただいているのではないかと思っております。

もう1つ，これは特に研究分野で，COEや古代学学術研究センターなどで行なっている他機関との共同研究，連携というものも，日常的に機関どうしで内実ある研究連携がどこまでできたかというと，まだまだ一部にとどまっているかと思います。ですから今，奈文研とプロテオミクスに基づく研究協定を結んでいますが，ほかの歴史学や考古学分野でもこういう協定を結び，実質的な連携がとれたらいいなと思っていますが，なかなか難しいところがあります。それに研究機

関との連携は，人的関係の上に成り立っているところも大いにあると思いますから，われわれの世代が大学からも研究所からもいなくなった次の時代にどうなっているかというと，保証はできないかもしれません。そうはならないようにしたいとは思いますが。

これで私の話を終わりにしたいと思います。ご静聴ありがとうございました。

---

**司会**：どうもありがとうございました。一応，予定された時間は18時30分までということですが，時間の許す限り，この後，討論できればと思っております。多岐に渡る教育，研究など，さまざまな点で博物館，研究所等との機関との連携について話していただきましたが，時間ですので，もうフリーでお話しいただければと思うのですが，何かございますでしょうか。

**Q**：よろしいでしょうか。大変貴重なお話をありがとうございました。最初に2つぐらい，お聞きしたいのですが，1つは，先ほどの後期課程における連携授業，A先生やいろいろな発掘調査や史料調査の最前線で行なっておられる研究者による贅沢な授業というふうにおっしゃいましたが，この授業の枠組みと，実際に先生が所属しておられる専任教員の歴史なり考古学なり比較文化学なりのカリキュラム等の関係はどういうふうになっていますか。カリキュラムの構造上，この連携講座が持っている位置付けを教えていただきたいと思います。

**舘野**：特にはありません。これらの方たちの授業が，ほかの専任教員の授業とリンクしているということはありません。同じように授業が並んでいる中の1つということです。

**Q**：それからもう1点ですが，奈良女子大学は古代を武器にしているとおっしゃっており，いろいろなシンポジウム等は外から拝見していたのですが，最後のところで問題点に挙げられた院生の充足の問題と関連させて，これだけのメニューがあって，場所もすごくいい。10年ほどやっておられたので，まだ効果という点では不十分かと思いますが，将来に向かっての入り口のところの大学院充足の効果ということはどのように考えておられますか。やはり相当皆さん，負担でしょうか。

**舘野**：これは，大学でも今，一番頭を悩ませているところです。ここの分野だけではなく，全体としてとにかく院生が集まらない。それは多分，全国的な傾向でもありますが，やはり出口がないためだと思います。特に女子大ですと，ドクターを出ても専門職に就ける可能性が小さいのです。本当に気の毒なのですが，ドクターを取っても，故郷に帰って研究とは全く関係ないところで働く，あるいは結婚して，お子さんができて，暫くは身動きがとれなくなるというような方たちが多いのです。そういう人たちを見ていますから，ドクターだけではなく，マスターにもなかなか学生が入ってこないということです。今，例えば古代史を専攻するマスターは，昨年入ってきた者は2人，今年3人で，以前よりは少なくなっていますし，去年の2人は留学生と他大学の卒業生で，内部からは1人もいなかったのです。今年も3人のうち2人は他の大学からの人でして，よその大学出身者は結構いるのですが，なかなか内部から上がってこないところがあります。COEをしているときは今以上に，ドクターの院生がいて，研究活動も盛んに行い，論文を書いたり博士号を取ったりもしたのですが，その後，ドクターに入る院生があまりいない。何とかしなければいけないのですが，まだ，なかなかいい知恵が浮かんできていません。

**Q**：はい，ありがとうございます。

**司会**：よろしいでしょうか。ほかの方は。はい，お願いします。

**Q**：大変丁寧に，具体的にお話ししてくださって，ものすごく参考になりました。私は専門が中国古代の思想・宗教なのですが，奈良はここに挙げておられる奈良博の夏季講座に何回か出席しております。

**舘野**：そうですか。

**Q**：本当にもったいない感じですね。これだけ素晴

らしい授業，メニューが用意されているのに，学生が少ないというのは。インターンも用意されているということですが，学生がこんなに少ないのは，やはり就職の問題があると。

**舘野**：私はそれが一番だと思います。

**Q**：インターンに参加した人たちというのは，それこそ奈文研とかそういうところで何らかのかたちで働きたいという希望を持っている人たちでしょうか。

**舘野**：この奈文研でのインターンシップは，昨年から始まったばかりです。昨年受講したのは，先ほども言ったように奈文研でアルバイトをしているというような人たちであり，奈文研やほかの研究機関などで働きたいという願いはもちろんあるのでしょうが，奈文研自体，欠員がないと職員の募集がない。

**Q**：定員はそうでしょう。

**舘野**：はい。

**Q**：定員以外でも。

**舘野**：定員以外には，あとは基本的にはもうアルバイトしかないです。ですからアルバイトというかたちで，働いたりはしています。

**Q**：それは，かなりの数ですか。

**舘野**：そうですね。私の指導している日本古代史のマスターですと，週1回，2回というかたちで，これから始める人も含めて，ほとんど全員が行っているというぐらいになります。

**Q**：今は就職が難しい時代ですから，何らかのかたちで，そういうアルバイトのかたちでもいいから，研究につながるようなかたちで持続して，もう少し後の段階で，本格的にもう一度勉強し直してというようなことを考えている女の人も多いのではないでしょうか。

**舘野**：そうですね。ドクターを出た後もずっと奈文研で，アルバイトや派遣というかたちで働いている人もいます。ただ，奈文研がアルバイトを雇える人数も，限られています。しかし，それに正式な職員として働くというのとは違いまして，アルバイトではなかなか生活ができませんから，やはり修了後は，奈文研以外のところで何か仕事を見つけるという人がほとんどです。

**Q**：留学生もと言われましたが，中国の古代などをやっている人たちが，奈良のことを調べたいということで来ているような人たちですか。

**舘野**：今，私のところのマスターに来ている中国の留学生は，中国にいるときは日本語の勉強をしていました。マスターに入ってから古代史，特に都城のことを日中比較しながら研究をしています。たいへん熱心で，語学も達者なので，彼女も奈文研でアルバイトをしています。あるいは台湾からの留学生で，日中を比較しつつ女性史の研究を行ない，ドクターを取って台湾に帰り，そして今は大学の専任講師をされているという方もいます。しかしそこでも教えるとなると，歴史ではなく日本語なのです。専門分野で，そのまま研究職になるという人はきわめて少ないですね。

**Q**：われわれのところも同じです。

**司会**：その件はよろしいでしょうか。そのほか，何かございますでしょうか。

**Q**：それでは。

**司会**：はい。

**Q**：一番最後に問題点をおっしゃっていたのですが，大学の側からすると，いろいろメリットがあるのですが，研究所のほうからしてみればメリットがないというのが問題点だということですが，その中でも，研究所，機関の側にとって，この連携から得ているメリットというのは，探せば何かあるのでしょうか。

**舘野**：先ほど言いましたように，特に独立行政法人が厳しい時代ですから，奈文研で言えば，奈良という場所において，研究だけでなく教育という活動も担っているということが，多分，そう簡単に研究所をつぶしたりすることはできないですよ，これだけ大きい役割を果たしているのですよ，というところにつながっているのではないかと思います。あとは，もっと日常的なことで言えば，そういう授業を受けている学生さんたちが，奈文研でアルバイトをするというかたちで，奈文研の活動を支えているということもあります。私がいたときから，アルバイトが大きな働きをしていましたから，いわば，そういう人たちを養成するような場にもなっているという面もあるかと思います。

**Q**：私の知人の例ですと，歴史関係ではなく，美術館なんですが，美術館というのは平常，あまり人がいらっしゃらないということがあるらしいです。縛りはあるのですが，例えば大学に非常勤講師をしに行くなどして，大学と縁を持つということは，僕にとっては非常にうれしいことです。また，大学とのいろいろなつながりを保持していくことができるわけです。そういうようなことが，美術館のようなところだと，また，だいぶ状況が違うのではないかと思います。

**舘野**：そうですね。そういうことはあるかとは思います。大学との連携が，今おっしゃったように，相手にとってもありがたい存在であり，あるいはそこでで

きたいろいろなつながりが，大学だけではなく，ほかの機関とのつながりにも発展していくということになれば，こちらも大変うれしいと思います。

**Q**：途中で中座しましたが，奈文研は歴博のように大学院大学として自前で人材育成するということにはならないのでしょうか。

**舘野**：それは文化庁の下ということもあり，なかなか難しいと思います。あくまで研究機関であって，教育は本来の役割ではないという組織でありますので。

**司会**：そのほかはいかがでしょうか。私もお伺いしたいことがいくつかあったのですが，もう所定の時間を超えておりますので，それはおいおいにお伺いすることにして，やはり，いろいろなことをやるにはメリット，デメリットがあり，デメリットだけを見ていたら物事は進まないと思うのですが，またデメリットに目をつぶって動かすのもなかなか難しいというところもあると思います。両方の側面からのお話を伺えて，大変ありがたかったのではないかと思います。もう少し，いろいろお伺いする時間を取れればよかったのですが，時間が来てしまいましたので，今日のところはこのあたりでお開きにさせていただければと思います。それでは，どうもありがとうございました。

**舘野**：話が長くなりすぎて，失礼いたしました。（拍手）

# 奈良女子大学大学院教育における地域連携

2011.7.7　舘野　和己（奈良女子大学文学部）

**はじめに**

奈良の地域性：古代以来の歴史が豊かな地

→独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・同文化財機構奈良国立博物館・宮内庁正倉院事務所・県立橿原考古学研究所・㈶元興寺文化財研究所・各市町村教育委員会など，多くの文化財調査・研究機関が存在

それらの機関と積極的に教育・研究上の連携を築き，大学の特色を生み出す

**１．大学院博士後期課程の教育における地域連携**

**１）大学院人間文化研究科の歴史**

1964年度　大学院家政学研究科（修士課程）発足

1965年度　大学院理学研究科（修士課程）発足

1968年度　大学院文学研究科（修士課程）発足

1980年度　大学院文学研究科に比較文化学専攻（後期３年博士課程）発足

1981年度　大学院人間文化研究科発足（博士後期課程のみ）

比較文化学専攻と生活環境学専攻の２専攻

└1980年に大学院文学研究科に博士課程の独立専攻として設置

社会文化論講座（社会学・哲学・史学・地理学）と

言語文化論講座（国語国文学・中国語中国文学・英語英米文学・言語文化学）

1998年度　５年制，博士前期・後期課程区分制の人間文化研究科発足

博士前期課程10専攻の設立

博士後期課程で複合領域科学専攻を新設→３専攻

1999年度

博士後期課程で比較文化学専攻と生活環境学専攻を改組

→比較文化学専攻と人間環境科学専攻を設置

複合領域科学専攻とともに３専攻

2003年度

人間環境科学専攻と複合領域科学専攻を統廃合

→社会生活環境学専攻・共生自然科学専攻・複合現象科学専攻に改組→４専攻に

**２）比較文化学専攻**

構成

文化論講座・日本アジア文化情報学講座・欧米地域文化情報学講座の３講座

学生定員12名

文化論講座：日本史・東洋史・西洋史・考古学・歴史資料論・比較民族文化論等

＋**（独）奈良文化財研究所**からの３名の客員教員

日本アジア文化情報学講座：国語国文学・中国語中国文学を基礎とする文化研究
＋**（独）奈良国立博物館・宮内庁正倉院事務所**から各 1 名の客員教員
欧米地域文化情報学講座：欧米の言語文化についての学際的研究

専攻の紹介（HP より）

本専攻は，主として文化，言語，歴史を研究対象とする三講座……から成っており，これら三講座間の学際的研究を推進することとを目的としています。歴史都市「奈良」において研究することの利点は，個別の学問領域において豊かな歴史資料に接近することが容易であるという点だけでなく，また同時に日本アジアと欧米の両文化を比較文化論の視点から分析することを可能にしてくれる点にもあります。本専攻では，文化を情報として扱う視点を重視して，膨大なデータ処理に必要な方法の探求にも力を注いでいます。

専攻の教育理念（HP より）

本専攻は，社会事象―言語認識，西欧世界―アジア世界という二つの基軸をたて，それに対応する，…… 3 つの講座から成っています。

高度な専門教育を通して，固有の学問領域の研究を深化させるとともに，これまで分化の方向に発展してきた諸科学を，実体的に融合させること，すなわち「諸科学の人間的意味づけ」を追求します。そのため，諸科学の多様性を〈文化〉として統合する知見を，適切な〈情報〉として取り扱う方法論によって，〈古代・奈良〉を基本的視座として，アジアおよび欧米の諸文化との比較研究の上に，広い視野に立った教育研究を行います。

文化論講座の紹介（HP より）

また，近隣の**奈良文化財研究所・奈良国立博物館・正倉院事務所**等の研究者や機関と交流し，〈古代・奈良〉を起点として諸文化を国際的に比較するという視点から研究を進めることのできる，他大学には見られない独自な講座です。奈良という地利を生かし，実地に即した比較を通して歴史＝文化を作ってきた「人間」の総体的な理解を目指しています。

### 3）比較文化学専攻における連携・協力協定

**奈良文化財研究所，奈良国立博物館，正倉院事務所**とそれぞれ，1999年 3 月31日に「奈良女子大学大学院人間文化研究科における連携・協力に関する協定書」及び「同協定書に基づく覚書」を締結→同年 4 月 1 日から実施，教員を迎える

**奈良文化財研究所**（旧・奈良国立文化財研究所）

連携・協力する分野は文化史論講座（「協定書」第 1 条）
研究員を**教授又は助教授に併任**する（「同」第 2 条）
→2001年度に奈良文化財研究所が独法化した後は「**客員**教授・助教授（准教授）」
教官等積算校費などは研究科において配分する（「同」第 4 条）
任用期間は 1 年とし，年度ごとに更新（「覚書」第 1 条）
併任教員は，**研究科会議の構成員**となる（「同」第 2 条）
原則として，講義は大学，**演習，実験・実習及び研究指導は奈文研で**（「同」第 3 条）

**奈良国立博物館・正倉院事務所**

連携・協力する分野は日本アジア文化情報学講座（「協定書」第 1 条）

研究員を**非常勤の教員に任用**する（「同」第 2 条）
その教員に対し，**客員教授又は客員助教授の称号を付与**する（「同」第 3 条）
任用期間は 1 年とし，年度ごとに更新（「覚書」第 1 条）
客員教員は，専攻会議等に出席することができる（「同」第 2 条）
**教育を行う場所は，原則として大学**（「同」第 3 条）

奈良女子大学大学院人間文化研究科における連携・協力に関する協定書

奈良女子大学（以下「大学」という。）と奈良国立文化財研究所（以下「奈文研」という。）は、連携・協力して奈良女子大学大学院人間文化研究科（以下「研究科」という。）の教育研究を行うにあたり、次のとおり協定を締結する。

（連携・協力講座）
1　大学と奈文研が連携・協力する分野は、研究科博士後期課程比較文化学専攻文化史論講座とする。
（併任教員）
2　大学は、奈文研との協議に基づき、奈文研の研究員を教授又は助教授に併任する。
（教育研究）
3　併任教員は、大学の規程に基づき教育研究を行う。
（研究費等）
4　併任教員の教官当積算校費、教官研究旅費及び学生当積算校費は、研究科の管理・運営に要する経費を除き、研究科において配分する。
（学生の身分等）
5　奈文研における学生の身分及び遵守事項等は、奈文研の定めるところによる。
（研究成果の公表）
6　学生の研究成果の公表は、大学と奈文研の協議に基づいて行う。
（関係機関への要望）
7　教育研究を円滑に行うため、関係機関へ要望する必要が生じたときは、大学と奈文研は協力してこれにあたる。
（覚書）
8　この協定によるもののほか教育研究を円滑に行うために必重な事項は、大学と奈文研との間で別途「覚書」を交わすものとする。
（その他）
9　この協定書に定める事項に疑義が生じた場合、若しくは改正の必要がある場合、この協定書に定めるもののほか必要な事項を定める場合は、大学と奈文研の協議により行うものとする。
10　この協定書は、平成11年 4 月 1 日から実施する。

この協定書は、 2 通作成し、大学と奈文研が各 1 通を所持するものとする。

平成11年 3 月31日

奈良女子大学学長名と奈良文化財研究所所長名で締結

## 奈良女子大学大学院人間文化研究科における<br>連携･協力に関する協定書に基づく覚書

奈良女子大学（以下「大学」という。）と奈良国立文化財研究所（以下「奈文研」という。）との間において、平成11年3月31日付けで締結した奈良女子大学大学院人間文化研究科（以下「研究科」という。）における連携・協力に関する協定書第8に基づき、次のとおり覚書を取り交わす。

（併任教員）

1　併任教員の任用期間は1年とし、年度ごとに更新するものとする。

2　併任教員は、研究科会議の構成員となる。

（教育研究）

3　教育を行う場所については、原則として、講義は大学とし、演習、実験・実習及び研究指導は奈文研とする。

（経費）

4　併任教員が奈文研において学生の研究指導等を行う場合の施設・設備の使用料及び光熱水料等は無償とする。

5　併任教員が奈文研において学生の研究指導等を行う場合に必要な物品は、研究科の予算の範囲内で研究科が調達し、奈文研に持ち込むことができる。

（災害傷害保険等）

6　研究科は、学生に対して学生数育研究災害傷害保険に加入するよう指導を行う。

7　奈文研において学生が関与する事故が生じた場合は、大学と奈文研が共同して事故発生の状況等について調査し、大学と奈文研の協議に基づき処理するものとする。

8　教育研究を行う上で、学生の故意又は重大な過失により文化財、設備等を亡失、破壊又は損傷し、奈文研又は第3者に損害を与えた場合は学生の責任とするが、大学と奈文研は誠意をもってその問題の解決にあたるものとする。

（その他）

9　協定書7の要望には、会計上の事項、俸給の調整額の支給、その他省令・規則等の改正を必要とする事項を含む。

10　この覚書は、必要に応じ大学と奈文研の協議により変更することができる。

この覚書は2通作成し、大学と奈文研が各1通を所持するものとする。

平成11年3月31日

# 奈良女子大学大学院人間文化研究科における連携・協力に関する協定書

奈良女子大学（以下「大学」という。）と奈良国立博物館（以下「博物館」という。）は、連携・協力して奈良女子大学大学院人間文化研究科（以下「研究科」という。）の教育研究を行うにあたり、次のとおり協定を締結する。

（連携・協力講座）
1　大学と博物館が連携・協力する分野は、研究科博士後期課程比較文化学専攻日本アジア文化情報学講座とする。
（客員教授等）
2　大学は、博物館との協議に基づき、博物館の研究員を非常勤の教員に任用する。
3　大学は前項の教員に対し、客員教授又は客員助教授（以下「客員教授等」という。）の称号を付与する。
（教育研究）
4　客員教授等は、大学の規程に基づき教育研究を行う。
（学生の身分等）
5　博物館における学生の身分及び遵守事項等は、博物館の定めるところによる。
（研究成果の公表）
6　学生の研究成果の公表は、大学と博物館の協議に基づいて行う。
（連携・協力の充実）
7　大学は連携・協力講座等の制度の充実改善に努めるものとする。
（覚書）
8　この協定によるもののほか教育研究を円滑に行うために必要な事項は、大学と博物館との間で別途「覚書」を交わすものとする。
（その他）
9　この協定は暫定的なものであり、改正が必要な場合は、大学と博物館の協議により行うものとする。
10　この協定書は、平成11年4月1日から実施する。

この協定書は、2通作成し、大学と博物館が各1通を所持するものとする。

平成11年3月31日

奈良女子大学学長名と奈良国立博物館館長名で締結

**4）客員教員の授業内容**（シラバスより）

①授業の概要　②学習・教育目標　③授業計画　④成績評価方法　⑤備考

**奈良文化財研究所からの客員教員**

A：歴史資料論Ⅰ・Ⅱ（日本史）A先生

①：文献史料だけでなく多様な資料が歴史資料として注目されるようになってきた今日，従来の枠組みにとらわれない**新しい歴史資料論**が必要となってきた。中でも考古学による調査成果，特に**木簡**，**漆紙文書**，**墨書土器**などの出土文字資料が歴史資料に占める位置づけは格段に大きくなってきている。このような新しい歴史資料を視野に入れながら，生の史料による新しい日本史の歴史資料論の構築を目指す。

②：**木簡を中心とする奈良時代の史料**の取り扱いに慣れ，古代の文字や情報伝達媒体の特質を理解する。そして，各参加者の専門分野に応じた，出土文字資料の活用をはかり，新しい歴史資料論の方法を習得する。

③：第1回　ガイダンス

第2回～第15回

・平城宮・京跡から出土した木簡を中心とする出土文字資料の解読を参加者全員で進める。一括性の高い木簡群を取り上げ，削屑まで含めた全体像の把握に努める予定。具体的に取り上げる資料は，参加者の問題関心を聞いた上で決めたい。

・授業参加者の専門分野や関心に基づいて，古代の文字資料に関する自由な報告を求め，参加者全員で討議する。

④：古代の文字資料の解読を自ら経験しその特質の体得に努めるのが授業の趣旨であるので，授業への積極的な参加によって評価を行う。

⑤：・日本史専攻だけでなく，文字に関心のある日本史以外の分野からの参加を特に歓迎する。

・授業は奈良文化財研究所において行うので注意すること。

・開講曜日については，最終的には受講者と相談の上，決定する。

B：文化財学の諸問題Ⅰ・Ⅱ（考古学）B先生

①：古代律令制の成立ならびに展開過程における，**手工業**の実態と変遷を明確にし，その歴史的意義を追究することをめざす。そのために発掘調査資料や関係論文などを用い，関連する周辺諸科学の成果などを視野に入れながら，関係する史料や古文書類なども取り上げ，幅広く総合的に検討を進め，主に演習形式で行う。

また単に資・史料や論文を検討するだけでなく，**実験的な形式の演習**を行うと共に受講生の研究発表も行う。

②：**古代手工業生産における「もの作り」の具体的な様相**を理解し，正しい知識を獲得して文化財を見る目を培う。そうして資・史料に潜む史実をより実態に即したかたちで理解する能力を養う。また受講生各自の研究課題に応じて，課題の立て方，立論の仕方，発表方法などの力量の向上もめざす。

③：前半は主に古代手工業生産に関連する考古・歴史・民俗関係の資料・論文・史料を元に，主として奈良における，鉄ならびに非鉄関連冶金手工業の生産方法や生産方式について分析・検討を進める。

後半では，これまでの分析・検討を総合しての奈良における古代律令制下の手工業生産体制の特質・意義について検討を行うとともに，中・近世における冶金関連手工業への発展についての展望を得る。また，各自の研究課題に応じた研究発表も行う。

④：授業での報告内容や討論への参加態度，出席状況などを総合して評価する。

C：歴史考古学特論Ⅰ・Ⅱ（考古学）C先生

①：特に奈良には，飛鳥・奈良時代の**工芸品**が集中して残っている。これらの内のいくつかを選び出して，その歴史的な位置づけとその製作技術やその背景となる彼らの知識について考える。考古学資料では，主に弥生時代などに視座を据えることにし，またその技術と活用法は，奈良や京都などの伝統工芸にかかわる現代の職人を訪ねて調査しこれを参考にする。

②：積極的に受講生の関心をくんでテーマを決める。そして事前にどんな準備が必要で，どのように調査するか，準備から立論・発表まで，考古学的手法を実地に体験する。きっと当時の人々が，自然を熟知しており，それをいかに有効に活用していたかを確認する場になるだろう。

③：前半・後半を通じて，**染色，木工，陶芸等**からいくつか具体的なテーマを設定する。その際には，前半と後半でテーマの重複は避ける。そしてできるだけ受講生の主体的な取り組みに期待して，関心のあるテーマに決めたい。また各テーマ毎に小題目を考え，これを深めながら，さらに総合化へと進む。

④：出席状況と授業での発言，数回のレポートを総合的に評価する。

⑤：講義は原則として，奈良文化財研究所においておこなうが，必要に応じて工房を訪ね調査する。

開講曜日・時限については，受講生と相談のうえ決定する。

奈良文化財研究所側の自己評価（HPにおける「奈良女子大学大学院の教育」の項より）

いずれも，飛鳥地域，藤原宮・京跡，平城宮・京跡などの**遺跡の発掘調査**，坩堝や羽口，木製品，木簡をはじめとする**遺物の調査研究に密着した授業**であり，**大学における通常の授業では経験できない，奈文研ならではの特色ある教育**を実践した。

**奈良国立博物館からの客員教員**

D：日本アジア古典資料論Ⅰ（日本史）D先生

①：日本では仏教が伝わって以来，脈々と写経がおこなわれてきた。そして，奈良時代以降に作成された**写経遺品**は，実数を把握できないほど数多く伝えられている。写経には仏典テキストそのもののほかに，古典資料研究に資する様々な情報が残されている。奥書・識語・書き込みなどの文字情報や，表紙・緒・軸といった形態的要素がそれに当たる。授業では，このうち文字情報に注目し，代表的な**写経識語**を古い時期のものから読み進め，日本の写経の概要と特質について論じる。

②：**写経識語**を正確に読解する能力を養う。また，それを通じ当時の人々の写経に対する考え方について理解を深める。さらに，識語だけでなく，日本の写経遺品の全般的な理解にも努める。

③：第1・2回　ガイダンスおよび概論

第 3 回～最終回　個別写経遺品の検討
④：授業内容を受けての課題レポートと，平常時の授業への参加度で評価する。

D′：日本アジア古典資料論Ⅱ（日本史）D先生
①：日本古代・中世仏教資料の識語と銘文
日本の古典資料のなかで大きなウェイトを占めるものに，**仏教資料**がある。写経遺品や聖教といった典籍，寺院資財帳や寺領関係文書などはその代表と言える。しかし，そうした紙媒体に記されたもの以外に，**仏像や仏具などの造形品に記された文字・文章（銘文）**があり，これも重要な仏教資料である。また，写経等の典籍であっても，本文テキストとは別に，それを製作した理由や目的を書き記すことがしばしばおこなわれた（**識語**）。
本講義では，こうした**銘文や識語**を読み進め，当時の人々の思考に迫ってみたい。当面は，**写経の識語と梵鐘の銘文**を取り上げる予定である。
②：仏教用語の多用される識語や銘文を正確に読解する能力を養い，それを通じて仏教についての理解も深める。加えて，当時の人々が書写や造形に対しどのような態度で臨んでいたかを理解することにも努める。
③：第 1 ・ 2 回　ガイダンスおよび概論
第 3 回～最終回　個別資料の検討
④：授業内容を受けての課題レポートと，平常時の授業への参加度で評価する。

**正倉院事務所からの客員教員**
E：日本アジア文献資料論Ⅰ・Ⅱ（日本史）E先生
①：日本古代の重要な文献史料である**正倉院文書**を主たる素材に，東アジア古代社会において「文字を使用してしごとを行う」ことの意味を視野に入れながら，文字資料から何を読みとることができ，いかなる歴史像を構築しうるかをテーマに授業を行う。
②：対象となる資料・史料に対し，多面的なアプローチで問題を発見し，読解・理解を試みる。未知の問題を発見する能力，それを解決する道筋を発見する力，という点を重視する。
③：第 1 回ガイダンス・授業に関する打合せ
第 2 回～第14回研究発表・討論
第15回まとめ
④：試験・レポートに相当する内容が，各回の授業の中に受講生への質問・回答のかたちで含まれるため，いわゆる平常点方式とする。

**5）自己評価**
『奈良女子大学大学院の現状と課題』（人間文化研究科　自己点検・評価報告書）2001年
第Ⅲ章　人間文化研究科博士後期課程
⑶　各専攻，講座における教育と改組を終えての状況
1）比較文化学専攻
併任・客員教員を配置することによって，**奈良国立文化財研究所・奈良国立博物館・宮内庁正倉院事務所と連携**し，**旧来の閉じられた学問からの脱皮を実現**している。（p. 51）

1 文化史論講座　⑪改組後の状況について

また，古代奈良を基本的視座に据えて，それとの関係性のなかで諸文化の歴史的かつ構造的比較をとおして，新しい日本のアイデンティティを確立していこうという目論みも，**独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所をはじめとした学外諸機関との連携**によって，いっそう確実なものになってきている。(p. 53)

**２．大学院博士前期課程の教育における地域連携**

**女性の高度な職業能力を開発する実践的教育**

文科省「大学院教育改革支援プログラム」に採択（2008年度～2010年度）

プログラムの目的（HP より）

男女共同参画社会をリードする女性高度専門職業人の養成を念頭に，主として博士前期課程の教育の実質化を図る。

人間文化研究科は，研究教育の学際化・高度化・個性化を通じて，男女共同参画社会をリードする女性研究者および女性高度専門職業人を育成し，社会に貢献することをめざしています。

このプログラムでは，特に高度専門職業人の養成を念頭に，主として博士前期課程の教育の実質化を図るために，従来なかった実践的な授業科目をカリキュラムに取り入れ，キャリア形成を支援します。対象となるのは博士前期課程のうち人社系の国際社会文化学専攻，人間行動科学専攻，住環境学専攻，生活文化学専攻および博士後期課程の社会生活環境学専攻の 5 つの専攻です。

プログラムの特徴

総合的な実践的科目群を展開

本プログラムの基本的な特徴は，歴史的に培われた本学の総合力を生かし，社会・文化・人間・環境・生活に関する専門的教育研究に加え，実習・実践的な側面を強化したカリキュラムを編成しています。

各専門領域で「実践基礎群」・「実践応用群」科目を展開し，従来の演習科目に加え調査やフィールドワークを基礎に，情報処理・分析や制作，企画・マネジメント，表現・プレゼンテーション等の能力，およびそれらを発信するコミュニケーション能力などを養成します。

具体的で関心に密着した実践基礎群科目

限定された課題や能力に関わる，比較的短期で展開する実践基礎群科目を強化・新設し，技術・技能の開発・伝達をめざし，学生の実践的な関心に応えます。これらの授業は，専任教員のみでなく，専門的な職域で深い知識や豊かな経験と能力を発揮している社会人や本研究科修了者をゲストスピーカーとして招くなど，多彩に展開されます。

専門的能力を磨き上げる実践応用群科目

従来の演習科目の内容を充実させたり，あるいは新設したりして実践応用群科目を作り，1 年次の後半から 2 年次にかけての時期を中心に密度の濃い実践的学習を行います。この科目群では，現地調査やフィールドワーク，制作実習など，座学では得られない実践的かつ専門的能力の向上をめざします。

開講科目
共通　【研究マネジメント群】
共通　【キャリア形成群】
専攻別　【国際社会文化学】【人間行動科学科】【住環境学】【生活文化学】

**インターンシップ専門実習（国際社会）**　共通【キャリア形成群】

開講期：前期　不定期

授業の概要：文化遺産を対象とする研究調査の現場（**奈良文化財研究所**）での，**専門的・実践的実習**を通じて，研究調査への学問の応用と実践的な技術及び研究調査成果の社会への還元の可能性について理解を深めさせ，修了後に社会において文化財保護等に貢献できる資質を養う。

学習・教育目標：研究調査への学問の応用に理解を深めるとともに，実践的な技術を習得・理解する。また，研究調査成果の社会への還元についても理解を深め，修了後に社会において文化財保護等に貢献できる資質を身につける。

授業計画：1．オリエンテーション
2．専門実習
・測量・発掘調査・遺物整理・実測・報告書の作成
3．実習のまとめ

＊具体的な実習内容は，受講者の希望・適性等も考慮して変更されることもあります。実習の日程等も受講者の希望を聞いたうえで決定します。ただし，必ずしも希望通りになるとは限りません。

成績評価方法：実習への取り組みの姿勢・態度等をはじめ，出席状況，レポート等を総合して評価します。

備考：ある程度の基礎的経験が必要ですので，受講予定者は事前に連絡して下さい。

# インターンシップ専門実習の実施に関する協定書

奈良女子大学大学院人間文化研究科（以下「甲」という。）と独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所（以下「乙」という。）との間で実施するインターンシップについて，以下のとおり協定を締結する。

（目的）

第１条　甲は，正規の教育課程におけるインターンシップ専門実習について，乙との連携により実習を実施し，甲の博士前期課程の学生に，文化遺産を対象とする研究調査の現場を経験させ，研究調査への学問の応用と実践的な技術及び研究調査成果の社会への還元の可能性について理解を深めさせ，教育効果を高めるとともに，修了後に社会において文化財保護等に貢献することを目的とする。

（実習生の派遣）

第２条　甲は，前条の目的を遂行するために学生を実習生として乙に派遣し，乙は，これを受け入れるものとする。

２　実習生の人数及び実習期間は，甲乙協議のうえ決定するものとする。

（実習計画書）

第３条　乙は，甲との協議に基づき，インターンシップの実習内容等を記載したインターンシップ専門実習計画書（別紙１）をあらかじめ作成するものとする。

２　乙は，実習計画の作成にあたって，実習期間中における実習の総時間数が30時間を下回らないよう考慮するものとする。

（実習生に対する事前指導）

第４条　甲乙双方は，実習生に対して，インターンシップの内容及び実施方法等について事前指導を行うものとする。

（実習の実施）

第５条　実習生は乙の職場において，乙の指定する職員の指導を受けるものとする。

（実習時間等）

第６条　実習生の実習時間は，原則として１日７時間45分以内，週38時間45分を超えないものとする。

（規則等の遵守）

第７条　実習生は，乙の定める規則を遵守しなければならない。

（実習に対する報酬）

第８条　実習生の実習に対する報酬は，原則として無償とする。

（交通費等の負担）

第９条　実習期間中における交通費及び食費等は，実習生の負担とする。

（保険加入）

第10条　実習生が実習中の事故により傷害を負った場合は，学生の加入する「学生教育研究災害傷害保険」（以下「傷害保険」という。）により補償する。

２　実習生が，実習中に乙又は第三者に損害を与えた場合は，「学研災付帯賠償責任保険」（以下「賠償責任保険」という。）によって弁済する。

３　甲は，前２項の取扱いについて実習生に了解させるとともに，傷害保険及び賠償責任保険に加入させるものとする。

（安全の確保）

第11条　乙は，実習生の実習現場における安全の確保に努めなければならない。

（実務担当者）

第12条　甲乙双方は，インターンシップ専門実習を円滑に実施するため，それぞれの実務担当者を置き，所要の体制を整えるものとする。

（守秘義務）
第13条　乙は，実習生が実習期間中に知り得る情報等について守秘義務の必要を認める場合は，当該学生に誓約書の提出を求めることができる。
２　甲は，実習期間中及び実習終了後，実習生が実習期間中に知り得た秘密を部外者に漏らさないよう指導・監督するものとする。
（実習の中止）
第14条　乙は，次の各号のいずれかに該当するときは，実習生の受入れを取り止めることができる。
⑴　災害その他止むを得ない事由により，乙が実習生の受入れを継続することができないと認めたとき
⑵　甲又は実習生がこの協定書に規定する条項に違反したとき
（実施結果の報告）
第15条　乙は原則として，実習期間終了後２週間以内にインターンシップ専門実習実施報告書（以下「実施報告書」という。）（別紙２）を作成し，甲に報告するものとする。
２　前項の実施報告書には，実習生から提出されたインターンシップ専門実習報告書（以下「実習報告書」という。）（別紙３）及びインターンシップ専門実習日誌（以下「実習日誌」という。）（別紙４）を添付するものとする。
（成績評価）
第16条　甲は，実施報告書，実習報告書，実習日誌等を総合的に評価し，単位の認定に伴う成績評価を行う。
（その他）
第17条　本協定書に定めのない事項，または本協定書に疑義が生じた事項については，甲乙双方が協議のうえ，決定するものとする。
２　本協定は締結の日から効力を発し，解除するときは，甲乙双方が協議のうえ，決定するものとする。
３　本協定の締結を証するため，本書２通を作成し，甲乙それぞれ１通を保管するものとする。

平成21年３月31日

奈良女子大学大学院人間文化研究科科長名と奈良文化財研究所所長名で締結

## 大学院 GP　授業実施記録

| 科目名 | インターンシップ専門実習（国際社会） | | | 講義コード | 7910614 |
|---|---|---|---|---|---|
| 担当教員 | 出田和久 | 教室 | 奈良文化財研究所 | 科目群 | キャリア形成 |
| 受講登録者数 | 3 | TA 時間数 | 0＋ | 学期・曜日・時限 | 前期・不定期 |
| 初回開講日 | 7月6日 | 主な使用機器 | | | |
| 授業のねらい・課題 | 文化財の研究調査に対する学問の応用に理解を深めるとともに、発掘調査現場における実習も行ない、実践的な技術を習得・理解する。また、研究調査成果の社会への還元についても理解を深め、修了後に社会において文化財保護等に貢献できる資質を身につける。 | | | | |
| 授業の経過<br>実施日・授業内容・出席状況・TA の活動状況・達成状況・反省事項・その他特記事項など | 7 月 6 日：ガイダンスを奈良文化財研究所にて実施<br>実習のスケジュール及び諸注意事項等について説明を行なう。<br>（出席：奈良文化財研究所　井上和人副所長、渡辺晃宏史料研究室長、及び出田）<br>8 月 9 日：奈良文化財研究所（平城地区）にて実施<br>・東院（469次調査区）の発掘現場において、担当者の桑田訓也研究員から調査に関する概要説明の後、遺構実測・遺構カード作成について実習を行なう。遺構検出作業の見学。<br>8 月10日：奈良文化財研究所（平城地区）にて実施<br>・東院（469次調査区）の発掘現場において、調査研究員の指導により遺構実測・遺構カード作成及び遺構（複雑な切合い関係の掘立柱で高度な判断力を要する）の検出作業の実習を行なう。<br>8 月11日：奈良文化財研究所（平城地区）にて実施<br>・井上副所長による講義：奈良文化財研究所の組織及び調査研究の概要や平城京の保存に関する説明の後、平城京の地割をはじめアンコールやベトナムでの調査研究の成果について講義があった。<br>・考古第 1 研究室が担当する木器、金属器、石器の収蔵庫を見学し、台帳やデータベースを利用した資料保管の方法及び資料整理作業等に関する知見を広めた。<br>・小池伸彦考古第 1 研究室長による冶金考古学を中心とする研究の最前線に関する講義があった。<br>8 月12日：奈良文化財研究所（平城地区）にて実施<br>・浅野啓介研究員の説明による史料研究室の見学及び木器処理室において実習を行なう。発掘調査の現場から持ち帰った土を洗浄し、遺物（主として木製品）を取り上げ、さらに遺物を洗浄する作業を実施した。木簡を多数含み、細心の注意が必要とされる作業の実習であった。<br>8 月13日：奈良文化財研究所（平城地区）にて実施<br>・考古第 2 研究室において森川実研究員の指導により東院（469次調査区）の発掘現場出土土器の仕分けや接合作業を行い、その後これまでの平城宮内出土品から貴重品や重要品を中心に実見。さらに平城京の土器の分類に関する講義があった。<br>・考古第 3 研究室において中川あや研究員による平城京の瓦に関する講義の後、瓦の拓本作製及び東院（469次調査区）の発掘現場出土瓦の型式分類を行なう。 | | | | |
| 授業実施回数 | 5日間 | 小テスト等回数 | — | 課題等提出回数 | 5 |
| 最終試験日 | — | 受験者数 | 3 | 合格者数 | 3 |
| 特記事項 | | | 授業アンケート実施の有無 | | 有 |
| 成果・学生の反応・改善点<br>機器や TA の活用、配付資料、授業内容・構成、シラバス、成績評価など | 奈良文化財研究所の配慮の行き届いた多岐にわたる有意義な実習であった。<br>平城宮内の実際の発掘現場における複雑な切合い関係の柱穴の検出作業をはじめ奈良文化財研究所ならではの高度な技術に接した体験やその実習及び最新の知識・知見に触れる諸講義は、大変勉強になったと学生に好評であり、通常の行政発掘では学ぶことのできない様々な調査研究の最新成果にも触れることができた意義は大きいようである。 | | | | |

参加学生のアンケート

奈文研ということで考古学の中央での体験はとても勉強になって，これからの進路や研

究に役立ったと思う。

実際に研究職（専門職）として働いている方の話を聞くことができ，将来のイメージをつかむ参考になったと思う。

**３．研究活動における地域連携**

**１）21世紀 COE プログラム（革新的学術分野） 2004年度～2008年度**

**「古代日本形成の特質解明の研究教育拠点」**採択（文化史論講座中心）

考古学･歴史学･国語学･国文学･地理学･建築史学･生活文化史学などの諸学の統合により，奈良という地理的特徴を生かして古代日本の形成過程とその特質を解明し，古代学を体系化することをめざす。←都に代表される「古代都市」をキーワードに

研究拠点形成実施計画より

奈良には，**奈良文化財研究所・奈良国立博物館・宮内庁正倉院事務所・橿原考古学研究所などをはじめとする，文化財の調査・研究にあたる機関**が多数あります。そして古代日本を研究するには，そうした機関と協力していくことが不可欠です。本学の大学院人間文化研究科博士後期課程では，既に奈良文化財研究所・奈良国立博物館・宮内庁正倉院事務所と提携を結び，各機関の研究者を**客員教員**として迎えています。本プログラムにもそれら客員教員が参加していますが，さらにそれ以外の機関・研究者も含め，**国内外を問わず幅広い研究ネットワークを築き，本拠点がその連携拠点に**なれるようにしたいと考えております。

実績報告書より

本拠点は，本事業の開始前までは相互連携が必ずしも十分ではなかった近隣の，奈良文化財研究所・正倉院事務所・奈良国立博物館・橿原考古学研究所・万葉古代学研究所や自治体などの研究機関との間に，古代都城制や古代日本語をめぐって，共同研究者・研究協力者，研究会・シンポジウム・講座の共催などの多様な形で，**緊密な協力関係を築き研究の推進を図った。また奈良文化財研究所・奈良国立博物館・正倉院事務所からは，拠点形成以前からの教育連携の上に，本拠点メンバーとして研究者を迎えた。**

さらに東アジア～ユーラシアをも視野に入れ，中国・韓国・ベトナムという共通した都城文化を有する**東アジア諸国の国家的文化財研究機関とも連携**をとって，当該諸国の古代都城・集落遺跡の現地調査を実施するとともに，古代都城を巡る国際シンポジウムを開催した。また，ベトナム・ハノイのタンロン城遺跡の調査・保存事業に，本拠点は継続的に協力を行った。

このような活動を通じて，本拠点は**古代日本に関わる国内外を通じた研究教育連携拠点**として立ち上がり，今後もその役割を果たし続けていく基盤ができた。

連携の具体的内容

拠点メンバーに，３名の客員教授を迎える（他大学から１名の特任教授も）

研究会・シンポジウムでの研究報告・共催など

奈良盆地歴史地理データベースの作成

小字データベース←橿原考古学研究所『大和国条里復原図』などのデータ

藤原京遺構データベース←奈文研などのデータ
若手研究者支援プログラム←2005年以来開催，万葉古代学研究所と共催
奈良国立博物館夏季講座の共催←奈良国立博物館，2006年以来

事後評価結果
（総括評価）
設定された目的は十分達成された
（コメント）
……地域に根差した統合的研究プロジェクトを，大学の全力をあげて完遂したことは何よりも高く評価できる。また，大学内部に留まらず，他の研究機関との共同研究においても極めて積極的であったと評価できる。……

**2）古代学学術研究センター**

古代日本の中心で奈良に立地する本学の特色を活かし，東アジアの広い視野の中で，日本古代の歴史・文学・言語などを学際的に研究することを目的として，2005年6月設置
→ COE 終了後，その活動を継承発展
①古代学分野，②環境歴史科学創成分野，③ GIS・情報発信分野の 3 つの研究分野
学内の現職職員のみならず，**OB 及び学外の文化財関係機関から特任教授**を迎える
OB：日本建築史・東南アジア建築史の研究者と中国語学・中国文学の研究者
学外：奈良国立博物館の研究者（仏教工芸史）
奈良県立橿原考古学研究所の研究者（考古学）
㈶元興寺文化財研究所の研究者（保存科学）
また奈良文化財研究所のB氏と正倉院事務所のE氏の 2 名の**客員教授を，職員に**加える

**奈良文化財研究所と連携研究協定書締結**　2010年10月25日
研究題目
**平城宮・京跡等出土のタンパク質含有資料に関する考古科学的研究**
研究目的及び内容
平城宮・京跡などで出土した，古代の絹や，膠を材料に用いる墨等のタンパク質を含む遺物について，プロテオミクスの手法に基づく詳細な科学的分析を行い，古代における動物利用の実態とその技術的基盤を解明する。これにより，奈良女子大学が行う古代史・環境史プロテオミクス研究創成事業と，奈良文化財研究所の行う文化財調査の推進を図る。
研究期間
自　平成22年10月25日　　至　平成24年 3 月31日
研究実施場所
国立大学法人奈良女子大学古代学学術研究センター，及び国立大学法人奈良女子大学古代史・環境史プロテオミクス研究創成事業本部
独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所

奈良女子大学学長名と奈良文化財研究所所長名で締結